

「ヒスタミン」作用ニ關スル知見補遺

第1報 「ヒスタミン」皮内反應ノ研究

第1編 健康兒ノ「ヒスタミン」皮内反應

金澤醫科大學小兒科學教室(泉教授指導)

島 崎 文 太 郎

Buntaro Simasaki

(昭和17年12月19日受附)

内 容 抄 録

近時「ヒスタミン」ガ各種疾患ノ原因又ハ一主要因子トシテ重要視サルハニ至リタリ。余ハ「ヒスタミン」皮内反應ガ各種疾患ニ對シテ如何ナル態度ヲ示スカヲ研究セントシテ、先ヅ健康兒68名ニ就キテ10.000倍鹽酸ヒスタミン」溶液ヲ用ヒテ皮内反應ヲ検査シテ次ノ如キ成績ヲ得タリ。

「ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ幼兒平均66.1分、學齡兒平均70.38分ニシテ、紅暈消失時間ハ幼兒平均61.0分、學齡兒平均65.6分ナリ。又生理的食鹽水扁平疹消失時間ハ幼兒平均30.1分、學齡兒平均33.4分ナリ。

目 次

第1章 緒 言

第2章 「ヒスタミン」ニ關スル文獻概説

1. 「ヒスタミン」ノ藥理學的作用
2. 「ヒスタミン」ノ體內分布
3. 「ヒスタミン」ノ生理學的意義
4. 「ヒスタミン」説ノ趨勢

5. 「ヒスタミン」皮内反應ニ就イテ

第3章 實驗材料及ビ實驗方法

第4章 實驗成績

第5章 總括及ビ考按

文 獻

第1章 緒 論

所謂疫痢様中毒症ノ發生機轉ニ關シテハ、腦炎説⁽¹⁾、小腸赤痢説⁽²⁾、特異性細菌毒素中毒説⁽³⁾、中間代謝産物中毒説⁽⁴⁾、非特異性細菌毒素タル「アミン」中毒説⁽⁵⁾⁽⁶⁾、「ヴィタミンB缺乏説⁽⁷⁾」等々各家各自ノ所論ヲ述ベテ本態解決ニ貢獻スルトコロアリ。一方體質の方面ヨリハ疫痢

罹患素質論ハ古クヨリ唱ヘラレ、伊東氏⁽⁸⁾ハ胸腺淋巴體質兒ガ疫痢ニ罹患シ易シト論ジ、西野、荒川⁽⁹⁾兩氏ハ外科の手術後所謂疫痢様中毒症狀ヲ呈セン15例ノ患者ニ胸腺腫大及ビ諸種淋巴装置ノ肥大著明ナルヲ發見シテ、伊東氏ノ説ニ賛シオレ共、胸腺淋巴體質必ズシモ疫痢異

常體質＝非ズト主張スル者モアリ。

箕田⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾氏ハ數回＝互リテ血管攣縮説ヲ主張シ、所謂疫痢様中毒症狀ノ發生病理ハ、心臟、血管及平滑筋組織乃至網狀織内皮細胞系組織等ノ自動運動可能性組織ノ異常反射運動ガ廳テ腦症狀トナリ、心障碍、其ノ他消化器系乃至代謝障碍症狀トナツテ現ハル、モノナリ。ト説キ更＝滿2、3歳乃至5、6歳ハ小兒期トシテハ發育比較的緩徐ナル時期ニシテ、血管平滑筋等自動運動可能性組織ノ痙攣質ヲ有スル者＝在リテハ調節機能モ不十分ニシテ、從ツテ輕易ナル病原＝ヨリ障碍ヲ發スルモノナリトナセリ。又和泉⁽¹²⁾、村田⁽¹³⁾氏等ハ家族的罹患ノ方面カラ體質遺傳説ヲ認メ、泉田⁽⁷⁾氏ハ「ビタミンB缺乏状態＝於ケル細菌感染＝ヨリ腸炎ガ急激＝斯カル重篤ナル中毒症狀ヲ發スルナラントシ、「ビタミンB大量療法＝ヨリ4例ノ疫痢ガ治癒セリト述ブ。惟フ＝「ビタミンB缺乏モ廣キ意味ヨリセバ、一種ノ異常體質状態＝在ルモノト考ヘテ可ナル可ク、同一原因＝ヨツテ異常反應ヲ惹起スルモノト解サル、處ナリ。

兎モアレ本症＝於テ消化管＝認メラル、變化ガ時＝屢々單ナル上皮剝離性加答兒＝止マリ而モ、重篤ナル疫痢様中毒症狀ヲ呈シ一旦治癒＝趣クヤ極メテ迅速＝恢復シテ重キ腸變化ヲ示ス＝至ラザルコトアル事實ヲ考慮セバ疫痢ガ單ナ

ル細菌感染＝ヨリテ成立スル疾患トハ認メ難ク、且ツ罹患年齢、家族的罹患等ヲ綜合考察セバ、異常體質ノ重要因子タルヲ認メザルヲ得ズ。

一方山下⁽¹⁴⁾氏ハ赤痢疫痢患者糞便中ノ「ヒスタミン」(以下「H」ト略ス)量ガ健康兒糞便中ノ含有量＝比シテ著明＝増加セルヲ報告シ、當教室西村⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾氏ハ泉教授指導ノ許＝特殊培養條件下ニテ大原菌、駒込B菌及ビ大腸菌ガ「H」ヲ生成スルコト及ビ疫痢様患兒糞便中ノ「H」量ガ症狀ノ經過＝伴ヒテ増減スルコトヨリ、所謂疫痢様中毒症狀發生機轉＝「H」ガ有力ナル可シト推論セリ。

最近谷口、神前⁽¹⁷⁾兩氏ハ疫痢經過兒ハ正常健康兒＝比シテ「H」皮内反應過敏ナリト報告シ、博田氏⁽¹⁸⁾ハ「H」皮内反應ガ疫赤痢症ノ豫後判定＝意義アリトナセリ。

泉教授ハ以上ノ諸説ヲ考慮シテ皮膚反應ノ方面ヨリ異常體質＝關シテ研究ス可ク余＝命ゼラレタリ。若シ疫痢患兒ガ「H」＝對シテ特異反應ヲ呈スルモノトセバ「H」原因説＝對スル有力ナル證左タル一方又疫痢罹患素質説明ヘノ意義大ナル可キヲ信ゼラル、處ニシテ余ハ此等ノ點ヲ考察セントシテ、各種小兒疾患患兒ノ「H」皮膚反應＝對スル態度ヲ研究セント企圖セリ。

第2章 「ヒスタミン」ニ關スル文獻概説

1. 「ヒスタミン」ノ藥理學的的作用

「H」ハ化學的＝ハβ-Imidazolyläethylamin＝シテ Windaus a. Vogt(1907)＝ヨツテ初メテ合成セラレ Barger a. Dale(1910)＝ヨツテ麥角中ノ有効成分トシテ抽出セラレテ以來醫界ノ注目スル所トナリ、諸學者ノ研究相續イデ起リ、是ガ「ヒスチジン」ノ側鎖＝於ケル-CO₂基脫＝ヨツテ生ズルモノト考ヘラレテキル。

「H」ノ藥理學的主作用ハ中心血管ノ收縮、並ニ之レニ基ク循環障碍、平滑筋ノ興奮、腺分泌ノ亢進等ヲ惹起スルモノニシテ、臨床的＝ハ中

毒症狀トシテ軽度ノ場合＝ハ顔面潮紅、心悸亢進ヲ見、更ニ進メバ眩暈、悪心、頭痛、血壓下降等ヲ來シ、重症ニテハ更ニ嘔吐、痙攣及ビ呼吸困難ヲ招來シテ所謂「ヒスタミン、ショック」＝陥ルト云フ。

2. 「ヒスタミン」ノ体内分布

「H」ガ微量ナレ共既＝健康人及ビ動物ノ各種臟器中＝存在スルコトハ先人諸家ノ業績＝明ラカナルトコロニシテ、或ハ化學的＝、或ハ藥理學的＝肺臟 (Best Dudley Thorpe 横山⁽¹⁹⁾、福田⁽²¹⁾、中村⁽²⁰⁾)、肝臟 (Hanke u. Koessler⁽²³⁾、

細谷、渡邊、米増⁽²⁶⁾、横山⁽¹⁹⁾、脾臓(Dudley、中村⁽²⁰⁾)、腎臓(横山⁽¹⁹⁾、秋山⁽²³⁾、米増⁽²⁶⁾)、腦下垂體(秋山⁽²³⁾、木島⁽²²⁾)、血液(横山⁽¹⁹⁾、米増⁽²⁶⁾)、尿(福田⁽²¹⁾)等＝證明セラレテキル。而シテ各種臓器内「H」含有量＝關シテハ其ノ方法ノ異ナル＝從ヒテ諸家ノ報告一致セザルモ、一般＝肺臓最モ多ク、肝臓之＝次ギ、血液、尿中＝モ僅カ＝存在スト云フ。

3. 「ヒスタミン」ノ生理的意義

既＝常態＝於テ生體各種臓器、組織中＝證明セラルル、「H」(又ハ「H」様物質)ノ生理學的意義＝關シテハ最近 Th. Lewis⁽³⁰⁾、Feldberg u. Schilf⁽²⁷⁾ 等＝ヨリテ簡明セラレタルトコロニシテ彼等＝ヨレバ「H」ハ正常ナル状態＝於テハ作用能力ナキ不明ノ形(横山氏ハ假リ＝Histaminogen ト稱ス)＝於テ存在シ、種々ノ刺激或ハ障碍ノ之＝加ヘラル、ヤ、作用性「H」又ハ「H」様物質トシテ組織細胞内ヨリ組織液中＝遊離シ、更＝血行内＝移行シテ種々ノ反應態度ヲ示スト云フ。而シテ健常體組織内＝於ケル「H」ハ組織新陳代謝調節物トシテ又、局所血管調節物トシテ作用シ一部ハ「ヒスタミナーゼ」ノ作用＝ヨリテ破壊セラレ、且ツ一部ハ尿中＝排泄サル、ナラント云フ⁽²¹⁾。

4. 「ヒスタミン」説ノ趨勢

Mellanby (1915) ハ小兒下痢嘔吐症ト「H」注射＝ヨル中毒症トノ類似點ヨリ同疾患ハ腸管内＝生ゼシ「H」＝ヨルモノナラントシ、Moro⁽³¹⁾ (1921) ハ乳兒消化不良症中毒症ノ原因ヲ腸管内＝傳染セル細菌＝ヨル蛋白質分解産物が透過性ノ充進セル腸管壁ヨリ吸收サル、ニヨツテ起ルトナシ、斯カル有毒物質ハ「アミン」例之「H」ナル可シト説ケリ。他方 Schiff u. Kochmann⁽³²⁾ (1922) ハ大腸菌ガ「アミン」ヲ形成スル事ヲ知リ、Georg Roske⁽³³⁾ (1928) ハ葡萄糖「ヴィオン」中ニテ大腸菌ガ「アミン」ヲ形成スルヲ知リ、Koessler u. Hanke⁽²³⁾ (1924) ハ人間ノ大腸ハ「ヒスタチン」ヲ「ヒスタミン」ニ變化セシムル機能ヲ有スル微生物ヲ有スルコトヲ知レリ。

Berthlot u. Bertrand⁽³⁴⁾ (1913) ハ腸炎患者ノ糞

便中ヨリ Baz. aminophilis ヲ分離シ該細菌ガ「ヒスタチン」カラ「ヒスタミン」ヲ形成スルト述べ、Barger a. Dale⁽³⁵⁾ (1911) モ「H」ノ存在ハ大腸菌簇＝ヨルトセリ。

所謂疫痢様症トノ中毒症發生ノ本態＝關シテハ大正13年川田⁽⁶⁾氏ハ「H」ナラントシ、翌14年楢林⁽⁵⁾氏ハ伊東氏ノ重症自家中毒症ノ本態ガ一種ノ「アミン」様ノモノニシテ、腸管内細菌ノ分解作用＝ヨリ食物ガ「アミン」例之「H」ノ如キモノヲ生ズルタメナラント推論セリ。最近當教室西村⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾氏ハ疫痢様中毒症トノ本態ヲ腸管内細菌＝ヨツテ產生セラレタル「H」又ハ「H」様物質＝ヨリテ惹起セラル可シト論ジ、疫痢様患者糞便中ノ「H」量ヲ測定シテ、症状ノ極期ニハ最高度＝増加シ、症状ノ恢復ト共ニ減少シクノヲ認メタリ。近時又「H」中毒症ト「アナフィラキシー」様又ハ「アレルギー」様疾患⁽³⁸⁾⁽⁴¹⁾⁽³⁷⁾、火傷性「ショック」⁽²⁴⁾、妊娠中毒⁽²¹⁾、腸管閉塞性中毒⁽³⁶⁾等ノ症状トノ類似點ヨリ是等各種中毒ノ本態ヲ「H」ヲ以テ説明解決セントスルノ趨勢ニアリ、疫痢様中毒症ノ本態＝關シテモ「H」説有力視サル、ニ至リタリ。

諸テ所謂疫痢様症トガ「H」＝ヨリテ惹起セラル、モノニシテ、且ツ腸管内「H」量ノ増加ト腸管壁透過性ノ異常充進＝ヨルモノナリトスルモ或特定年齢患兒ノミ＝斯カル重篤ナル症状ヲ惹起セシムル原因＝關シテハ細菌ノ毒素產生關係、罹患腸管部位等ノ問題ノ外解毒臓器ノ能力或ハ「ヒスタミナーゼ」ノ消長、個體ノ「H」感受性が研究サレネバナラザルモノトス可キデアル。

清野、大久保⁽²⁾兩氏ハ小兒赤痢屍＝於ケル消化管粘膜ノ病理解剖學的變化ヲ説明シテ、小兒赤痢ハ屢々腸ノ比較的上部＝高度ノ變化ヲ生ジ易キ事特異ナリト述べ、伊澤⁽⁴⁾氏モ消化器機能ノ大人ト異ナル點ヲ指摘シテキル。又體內各種臓器ノ「H」解毒能力＝關シテハ Dale a. Richards (1918)、Guggenheim u. Löffler⁽⁵⁹⁾、Hanzlik a. De Eds (1926)、Steggerda, Essex u. Mann、田邊、米増氏等ハ肝臓ノ解毒能力可

ナリ強力ナリト述べ、Steggerda, Essex u. Mann 及び森川、中島氏等ハ腎臓ノ解毒能力最モ優レリトナセルニ對シ Koessler u. Hanke ハ肝臓ノ解毒能力ハ低位ニアリト主張ス。

以上諸家ノ報告ニヨリ一部ノ解決ハ與ヘラレトシテモ、疫痢異常體質究明ノ資トシテハ未ダ充分ト云フ能ハズ。而シテ「H」感受性如何ノ問題ニ關シテハ前述、谷口、神前兩氏ノ報告アルノミニシテ誠ニ寂莫ノ感ニ堪ヘズ。

5. 「ヒスタミン」皮内反應ニ就イテ

皮膚「H」反應ニ關シテハ Th. Lewis u. Mitarbeiter⁽³⁰⁾ ニヨツテ詳細ナル研究發表アリ。今1000倍鹽酸「H」水溶液ヲ輕ク亂切セル表皮上ニ滴下スレバ、Lewis ノ所謂三重反應ガ現ハレル。即チ10秒乃至20秒後ニ現ハレル局所ノ發赤ト2分乃至3分後ニ現ハレル扁平疹及ビ扁平疹ヲ繞ル20纏乃至30纏ノ直径ヲ有スル紅暈デ、扁平疹及ビ局所發赤ハ皮膚上層小毛細血管自身ヘノ直接刺戟デアリ、扁平疹ヲ繞ル紅暈ハ Axon-reflex デ其ノ支配スル總テノ血管ニ充血ヲ起サシムルト云フ。而シテ同様ノ皮膚變化ハ芥子泥貼布ノ際ニ、又強度ノ皮膚摩擦ニヨツテ生ズルモノニシテ、Th. Lewis u. Y. Zottermann ノ研究ノ結果ニヨレバ溫熱、寒冷、紫外線照射等ノ理學的刺戟ニヨツテ、又過敏症性機轉ニヨツテ生ズル紅斑ノ原因ハ一様ニ「H」様物質ナリト云フ。Th. Lewis u. Harmer (1927) ガ4例ノ蕁麻疹ヲ伴フ患者ニ就イテ其ノ廣汎ナ皮膚面ヲ強ク摩擦シタトコロ、顔面潮紅、皮膚溫度ノ上昇及ビ時ニ僅カノ血壓下降等ガ見ラレ、恰モ少量ノ「H」ヲ皮下注射セル場合ト類似シテキタ。彼等ハ其ノ原因ヲ皮膚内ニ「H」様物質ガ生成セラレ、該物質ガ全身循環系内ヲ通過シテ斯様ナ全身症狀ヲアラハスナラントセリ。種々ノ刺戟ニヨリテ皮膚「H」量ノ増加ヲ來スト云フ觀念ハ然シ古クヨリ存スルモノニシテ、既ニ1921年 Trendelenburg ハ紫外線ニテ照射セラレタル「ヒスタミン」溶液ハ海狸腸管ニ對シテ興奮性ノ變化ヲ示スモ非照射「ヒスタミン」溶液ハ何等ノ

反應ヲモ示サザル事實ヨリ、皮膚ニ光線ヲ照射セバ、該光線ノ作用ニヨリ既存「ヒスタミン」ヨリ「H」ガ生成サレ、其ノ結果トシテ光線紅斑ガ生ズルナラント述べ、E. Nathan u. Sack⁽⁴⁸⁾ (1922) モ紫外線照射ニヨリテ炎衝ヲ惹起センメタル海狸皮膚滲出液ハ炎衝惹起性効果大ナリト述べ、St. Rothmann (1923), Rajka u. Wessely (1927), Ebbeck (1923) 等ハ照射光線作用ノ原因ハ或不明ノ物質ノ生成サル、ニヨルナラントセリ。

Harris⁽⁴²⁾ (1927) ハ人皮膚ノ「アルコール」滲出液ヲ皮内ニ注射セバ「H」ヲ注射セル時ト同様ノ反應ヲ呈スト述べ、Kawaguchi⁽⁴⁴⁾ (1930) ハ強烈ナル直射日光光線照射後ニ皮膚ノ「コレステリン」量ガ著明ニ増加ヲ來スコトヲ認メ、更ニ Trendelenburg 氏腸管法ニヨリ海狸皮膚滲出液ヨリ「H」様物質ヲ證明シ、直射日光光線照射ニヨリ該物質ハ増加スト云フ。他方、H. O. Loos⁽⁴⁵⁾ (1935) ハ皮膚炎衝部位ノ「H」ガ著明ニ増加ヲ來セルコトヲ認メタリ。更ニ Robertson a. Boyd (1923) ハ火傷皮膚滲出液ヲ動物ニ注射シテ「ヒスタミン、ショック」様ノ現象ヲ見タリト報告シ、藤田氏 (1924) ハ加熱及ビ非加熱皮膚「エキス」ヲ動物ニ注射シテ、其ノ毒性ハ加熱セルモノガ非加熱性皮膚「エキス」ニ比シテ遙カニ強キ事ヲ實驗セリ。反之シテ、Harris (1927) ハ火傷又ハ凍傷ヲ加ヘシ人皮膚内「H」様物質ハ加害直後ニハ動搖ナク稍々後ニハ寧ロ加害部ニ減少シユクノヲ見タリト云ヒ、Linser u. Kropatsch ハ紫外線照射ニヨリテ炎衝ヲ起サシメタル海狸皮膚滲出液ハ海狸ニ對シ何等認ム可キ結果ヲ得ザリキト述べ、Roussy u. Mosinger (1931) ハ蕁麻疹様患者皮膚ニ器械的刺戟ヲ加ヘシモ何等著明ナル紅斑モ浮腫モ起ラザリキト云フ。

要之スルニ、種々ノ機械的或ハ化學的刺戟ニヨツテ皮膚「H」量ノ増加スルコトハ一般ニ認メラレテキルノデアアルガ、所謂 Lewis ノ三重反應、或ハ蕁麻疹様ノ皮膚變化ガ、皮膚内遊離「H」直接ノ作用ニ由ルヤ否ヤニ關シテハ未ダ研

究ノ餘地アリト考ヘラル。

第3章 實驗材料及ビ實驗方法

1) 被験兒童

市内某慈善院内託兒所兒童ヲ主トシ、某育兒院收容兒童ノ少數ヲモ選出セリ。

何レモ既往歴、及ビ現狀ニ於テ全ク健康ト診斷サレタル小兒68名ニ就イテ検査セリ。

2) 使用「H」及ビ生理的食鹽水

武田製鹽酸「H」ノ10000倍生理的食鹽水溶液ノ0.01㊉ヲ用ヒタリ。

武田製鹽酸「H」ニ就イテハ當教室西村氏ガ瀨良氏法ニテ比色定量セル結果ニヨレバ、「H」ノ1㊉中ニ約0.9~0.6㊉ノ「H」ヲ含有スト云フ。余ハ該鹽酸「H」ノ定量値ニ從ヒ、10㊉ヲ正確ニ秤量シテ、コレヲ $P_{H}=7.2$ ノ殺菌生理的食酸水90~60㊉ニ稀釋セルモノ、0.01㊉ヲ用ヒタリ。該溶液ノ稀釋度ハ10000倍ニシテ、注射量ハ1/1000㊉ニ相當ス。

3) $P_{H}=7.2$ ナル生理的食鹽水

酸及ビ「アルカリ」ガ皮内反應ニ及ボス影響ヲ可及的僅少ナラシメガ爲 P_{H} ヲ確實ニ7.2トナセルモノヲ使用セリ。

上記二種ノ溶液ヲ夫々「ツベルクリン」注射器内ニ用

意シ、被檢者ノ前膊屈側中央部ヲ「エーテル、アルコール」ニテ清拭シ、全ク乾燥スルヲ待チテ左前膊ニハ「H」溶液ヲ右前膊ニハ生理的食鹽水ヲ注意深ク皮内注射セリ。注射終ルヤ直チニ「ストツプ、ウオツチ」ヲ用ヒテ三重反應出現狀態ノ時間的經過ヲ觀察シ次イデ5', 10', 15', 20', 30'ノ5回ニ亘リテ扁平疹及ビ紅暈ノ大サ及ビ消失時間ヲ測定記入セル後、5'毎ニ觀察シテ扁平疹及ビ、紅暈ノ消失時間ヲ測定セリ。扁平疹ノ消失時間ニ關シテハ紅暈強度ニシテ扁平疹ノ狀態不明ナル場合アルニ鑑ミ、皮膚浸潤、硬結ノ消失時間ヲ記入セリ。

紅暈ハ其ノ色調ノ強弱ニ從ヒテ士、十、十、十等ノ符號ヲ用ヒ、肉眼ニテ辛フジテ認メ得ルモノニシテ、大サノ測定困難ナルモノヲ士、色調弱キモ容易ニ認メ得ルモノヲ十、色調稍々強キモノヲ十、紫紅色ヲ呈スルモノヲ十トセリ。

對照食鹽水ニテハ紅暈殆ンド出現セザルカ又ハ極メテ一過性ナルノ故ヲ以テ、扁平疹消失時間ノミヲ記載セリ。

第4章 實驗成績

先ヅ最初ニ臨床診斷上ニ應用シ得ベキ最大稀釋度ノ「H」濃度ヲ求メントシテ市内某育兒院兒童10名ニ就キテ鹽酸「H」溶液ノ2,000,000倍ノモノヲ使用セルニ扁平疹ノ膨隆著明ナラズ且ツ紅暈ハ全ク現ハレザルモノアリ發現セル場合ニテモ肉眼ニテ辛フジテ認メ得ル程度ノモノニシテ診斷上ノ價値ナシ。

而シテ鹽酸ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ平均37.0分、紅暈消失時間ハ平均12.0分ノ成績ヲ

得タリ(第1表參照)。

更ニ市内某育兒院學齡兒16名ニ就キテ鹽酸「H」溶液1000000倍ノモノヲ使用セルニ扁平疹、紅暈共ニ2000000倍使用ノ場合ト大差ナク診斷上價値ナキヲ知レリ。

而シテ鹽酸ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ平均42.0分、紅暈消失時間ハ平均25分ノ成績ヲ得タリ(第2表參照)。

第1表 健康兒童「ヒスタミン」

皮内反應成績(男4名
女6名)
(2000000倍溶液)

氏名	年齢	性	反應(耗)	消失時間(分)
平○照○	5j	♂	$\frac{3 \times 3}{(-)}$	$\frac{30(20)}{0}$
高○房○	5j	♀	$\frac{3 \times 4}{5 \times 7(\pm)}$	$\frac{30(20)}{10}$
川○雅○	5j 1m	♂	$\frac{5 \times 5}{6 \times 7(\pm)}$	$\frac{45(30)}{10}$
中○節○	5j 1m	♀	$\frac{4 \times 6}{(-)}$	$\frac{45(40)}{0}$
寺○藤○	5j 5m	♀	$\frac{4 \times 5}{7 \times 7(\pm)}$	$\frac{40(30)}{30}$
尾○茂○	5j 11m	♂	$\frac{3 \times 3}{5 \times 6(\pm)}$	$\frac{40(30)}{10}$
寶○治○	6j 11m	♂	$\frac{3 \times 4}{5 \times 7(\pm)}$	$\frac{30(20)}{10}$
西○萬○子	13j	♀	$\frac{3 \times 3}{5 \times 6(\pm)}$	$\frac{30(20)}{10}$
宮○外○	14j 2m	♀	$\frac{3 \times 4}{7 \times 6(\pm)}$	$\frac{50(45)}{20}$
高○都○	15j 4m	♀	$\frac{3 \times 3}{5 \times 6(\pm)}$	$\frac{30(40)}{20}$

備考

- 表中反應(耗) $\frac{3 \times 4}{5 \times 7}$ トアルハ分子ニ相當セル數字ハ扁平疹ノ大サ分母ニ相當セル數字ハ紅暈ノ大サヲ示ス。
- 消失時間(30)トアルハ生理的食鹽水扁平疹ノ消失時間ヲ示ス。

次イデ市内某慈善院幼兒及學齡兒合計17名ニ就キテ「H」溶液 300000 倍ノモノヲ使用セルニ扁平疹及ビ紅暈ノ發現判然トシテ判定上ニ價値アルヲ知レリ。

而シテ斯カル濃度ニ於テハ鹽酸ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ幼兒平均 46.0分, 學齡兒平均 50.6分, 紅暈消失時間ハ幼兒平均 47.0分, 學齡兒平均 41.0分ナル成績ヲ得タリ(第3表参照)。

然レ共斯カル濃度ニテモ個體ニヨリ, 紅暈ノ色調判然タルザル場合ニ相遇スル率多キヲ以ツ

第2表 健康學齡兒「ヒスタミン」

皮内反應成績(男10名
女6名)
(1000000倍溶液)

氏名	年齢	性	反應(耗)	消失時間(分)
村○榮○	7j 9m	♂	$\frac{6 \times 7}{(-)}$	$\frac{40(30)}{0}$
水○千○	7j 3m	♀	$\frac{5 \times 6}{7 \times 9(\pm)}$	$\frac{38(38)}{10}$
小○二○子	7j 8m	♀	$\frac{5 \times 7}{15 \times 25(+)}$	$\frac{40(30)}{40}$
藤○祐○郎	8j 11m	♂	$\frac{4 \times 5}{6 \times 8(\pm)}$	$\frac{50(50)}{30}$
中○外○	9j 2m	♀	$\frac{4 \times 5}{13 \times 12(\pm)}$	$\frac{38(40)}{30}$
野○和○	10j	♂	$\frac{5 \times 5}{(-)}$	$\frac{50(30)}{0}$
佐○富○	10j 2m	♂	$\frac{5 \times 4}{(-)}$	$\frac{30(30)}{0}$
西○志○子	10j 8m	♀	$\frac{5 \times 5}{18 \times 15(\pm)}$	$\frac{48(36)}{48}$
水○安○	10j 2m	♀	$\frac{5 \times 5}{25 \times 15(+)}$	$\frac{59(30)}{50}$
寺○道○	10j 2m	♀	$\frac{6 \times 6}{10 \times 8(\pm)}$	$\frac{55(30)}{30}$
宮○武○	11j 3m	♂	$\frac{5 \times 4}{20 \times 14(+)}$	$\frac{42(36)}{40}$
澤○良○	12j 7m	♂	$\frac{6 \times 5}{10 \times 10(\pm)}$	$\frac{30(30)}{30}$
彦○卯○	12j 4m	♂	$\frac{5 \times 6}{7 \times 8(\pm)}$	$\frac{35(30)}{10}$
北○吉○	14j 5m	♂	$\frac{5 \times 5}{(-)}$	$\frac{40(35)}{0}$
若○暢○	14j 2m	♂	$\frac{5 \times 5}{12 \times 12(\pm)}$	$\frac{30(40)}{30}$
中○瑞○	15j 1m	♂	$\frac{5 \times 5}{10 \times 12(+)}$	$\frac{50(40)}{50}$

テ更ニ判定ヲ確實ナラシメンガ爲ノ目的ニテ余ハ前述ノ如キ鹽酸ヒスタミン」10000 倍溶液ヲ使用スルコト、セリ。コノ濃度ニ於テハ扁平疹, 紅暈ノ發現判然トシテ判定容易ナリ。

第 3 表 健康幼兒及學齡兒「ヒスタミン」皮内反應成績表

(男10名) (女7名) (300000倍溶液)

氏名	年齢	性	反應(耗)	消失時間(分)
岡○美○子	3j 7m	♀	$\frac{6 \times 5}{20 \times 15(\pm)}$	$\frac{40(30)}{45}$
砂○清○	5j 11m	♀	$\frac{7 \times 8}{20 \times 16(\pm)}$	$\frac{45(30)}{45}$
廣○利○	5j 2m	♂	$\frac{5 \times 5}{20 \times 25(\pm)}$	$\frac{45(30)}{45}$
小○幸○	5j 11m	♂	$\frac{7 \times 6}{10 \times 15(\pm)}$	$\frac{55(45)}{55}$

氏名	年齢	性	反應(耗)	消失時間(分)
道○孝	6j 8m	♂	$\frac{6 \times 5}{15 \times 15(+)}$	$\frac{50(40)}{50}$
安○孝○	7j	♀	$\frac{6 \times 5}{7 \times 10(+)}$	$\frac{40(30)}{38}$
杉○修○	7j	♂	$\frac{5 \times 6}{14 \times 20(+)}$	$\frac{38(20)}{35}$
藤○榮○	7j 11m	♀	$\frac{6 \times 7}{20 \times 15(+)}$	$\frac{50(30)}{55}$
小○千○子	8j 1m	♀	$\frac{5 \times 5}{15 \times 25(+)}$	$\frac{50(40)}{50}$
川○良○	8j 7m	♂	$\frac{5 \times 5}{15 \times 20(+)}$	$\frac{48(40)}{48}$
清○正○	9j	♂	$\frac{6 \times 5}{20 \times 25(+)}$	$\frac{57(40)}{50}$
佐○幸○	9j 1m	♀	$\frac{6 \times 6}{(\pm)}$	$\frac{55(40)}{55}$
北○忠○	9j 4m	♂	$\frac{5 \times 4}{17 \times 15}$	$\frac{50(35)}{50}$
三○正○	9j 3m	♂	$\frac{6 \times 6}{10 \times 12(\pm)}$	$\frac{50(30)}{20}$
鶴○邦○	9j 7m	♂	$\frac{6 \times 6}{15 \times 20(\pm)}$	$\frac{50(30)}{30}$
小○金○	12j 11m	♀	$\frac{7 \times 6}{25 \times 20(+)}$	$\frac{70(45)}{65}$
佐○秀○	14j 2m	♂	$\frac{6 \times 4}{12 \times 10(\pm)}$	$\frac{50(50)}{50}$

10000倍鹽酸「ヒスタミン」溶液ヲ注射セル

場合ノ實驗成績

年齢滿2年乃至6年ノ健康幼兒男女合計28名
＝關スル皮内反應成績ノ結果ハ第4表ニ示セル
通りニシテ、

更ニ本成績ヲ健康學齡兒男女合計40名ニ就キ
行ヒタル皮内反應成績ノ結果ト比較スルニ、消
失時間ハ前者ニ於テ何レモ短縮シアリ。

健康兒「H」皮内反應ニ關スル文獻ハ余ノ涉獵
セル範圍内ニテハ谷口、神前兩氏ノ報告ヲ知ル

ノミニシテ而モ、扁平疹及ビ紅暈ノ消失時間ニ
關シテハ未ダ其ノ數字ノ報告ヲ見ズ。今健康成
人ノ「H」皮内反應成績ニ就イテ、二、三氏ノ報
告ヲ述ブレバ、笠井氏⁽⁴⁹⁾ハ武田製鹽酸「H」ノ
3000倍水溶液0.1ccノ皮内注射成績ニ於テ、
「H」扁平疹消失時間65分、生理的食鹽水扁平疹
消失時間55分ヲ報告シ、永澤、平岩⁽⁴⁸⁾兩氏ハ
同様ノ方法ヲ用ヒテ「H」扁平疹消失時間63.3
分、生理的食鹽水扁平疹消失時間57.0分ヲ報告
ス。

第 4 表 健康幼児「ヒスタミン」皮内反應成績 (男17名
女11名)

氏 名	年 齡	性	反應(耗)	消失時間 (分)
伊○ 園○	2j 11m	♀	$\frac{8 \times 9}{20 \times 25(+)}$	$\frac{80(30)}{75}$
吉○ 時○	3j	♀	$\frac{7 \times 10}{30 \times 30(+)}$	$\frac{75(30)}{55}$
岡○美○子	3j 7m	♀	$\frac{10 \times 7}{35 \times 25(++)}$	$\frac{80(30)}{65}$
浦○ 明	4j	♂	$\frac{10 \times 10}{25 \times 30(+)}$	$\frac{40(20)}{75}$
内○信○郎	4j 6m	♂	$\frac{10 \times 7}{\pm}$	$\frac{50(20)}{40}$
本○ 昭	4j 3m	♂	$\frac{10 \times 9}{25 \times 20(+)}$	$\frac{80(30)}{70}$
杉○ 宗○	4j 2m	♂	$\frac{12 \times 9}{20 \times 20(+)}$	$\frac{55(40)}{55}$
藤○ 正○	4j 8m	♂	$\frac{10 \times 10}{30 \times 25(+)}$	$\frac{65(30)}{65}$
土○ 忠○	4j 8m	♂	$\frac{10 \times 10}{25 \times 35(++)}$	$\frac{65(30)}{60}$
松○ 昇	4j 9m	♂	$\frac{12 \times 9}{25 \times 20(+)}$	$\frac{75(30)}{60}$
笠○ 久	4j 8m	♂	$\frac{10 \times 8}{\pm}$	$\frac{80(40)}{40}$
太○外○子	4j 8m	♀	$\frac{8 \times 9}{20 \times 25(+)}$	$\frac{70(40)}{60}$
吉○ 義○	5j 1m	♂	$\frac{10 \times 7}{25 \times 20(+)}$	$\frac{70(20)}{60}$
吉○ 義○	5j	♂	$\frac{10 \times 10}{22 \times 30(+)}$	$\frac{75(45)}{60}$
田○喜○男	5j	♂	$\frac{9 \times 8}{25 \times 25(+)}$	$\frac{80(45)}{60}$
新○外○男	5j 8m	♂	$\frac{10 \times 9}{25 \times 25(+)}$	$\frac{65(40)}{65}$
上○ 光○	5j 9m	♂	$\frac{10 \times 8}{25 \times 20(+)}$	$\frac{65(40)}{60}$
吉○ 進	5j 8m	♂	$\frac{10 \times 8}{30 \times 30(+)}$	$\frac{75(20)}{60}$
米○ 邦○	5j 11m	♂	$\frac{10 \times 8}{30 \times 35(+)}$	$\frac{70(20)}{75}$
笠○ 久○	5j 10m	♀	$\frac{10 \times 7}{30 \times 35(+)}$	$\frac{50(40)}{75}$
北○ 繁	6j 5m	♂	$\frac{8 \times 6}{20 \times 20(+)}$	$\frac{55(45)}{55}$
清○ 健○	6j 2m	♂	$\frac{7 \times 5}{15 \times 20(+)}$	$\frac{30(20)}{45}$
北○ 子	6j	♀	$\frac{10 \times 8}{\pm}$	$\frac{65(30)}{55}$
本○ 敏○	6j 2m	♀	$\frac{12 \times 11}{20 \times 20(+)}$	$\frac{75(45)}{65}$
杉○ 道○	6j 3m	♀	$\frac{8 \times 10}{30 \times 30(++)}$	$\frac{80(30)}{70}$
木○ 春○	6j 5m	♀	$\frac{10 \times 8}{30 \times 30(+)}$	$\frac{50(40)}{65}$
伊○ 春○	6j 6m	♀	$\frac{8 \times 7}{25 \times 30(+)}$	$\frac{55(40)}{50}$
砂○田○子	6j 3m	♀	$\frac{10 \times 7}{25 \times 20(+)}$	$\frac{75(30)}{70}$

備考 1. 表中反應(耗) $\frac{8 \times 6}{20 \times 25}$ (+) トアルハ分子ニ相當セル數字ハ扁平疹ノ大サ, 分母ニ相當セル數字ハ紅暈ノ大サヲ示ス.

2. 消失時間(30)トアルハ生理的食鹽水扁平疹ノ消失時間ヲ示ス.

扁平疹消失時間判定ノ基準ニ關シテハ Mc. Clure a. Aldrich 兩氏ニヨレバ, 皮内ニ注射シテ生ゼル扁平疹ノ全ク消失セル時ヲ以ツテ記載ス可キナリト云フ. 然ルニ上記笠井, 永澤氏等ハ何レモ紅暈消失時間ヲ以テ判定基準トナシ, Laas 氏モ同様ナル判定方法ニヨレルモノノ如

シ. スカル判定基準ニ關シテハ一考ヲ要ス可キニハ非ザルカ.

余ガ10名ノ健康成人ニ就キテ行ヒタル成績ハ第6表ニ示セル如クニシテ「ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ74.0分, 紅暈消失時間73.8分ナリ.

第 5 表 健康學齡兒「ヒスタミン」皮内反應成績 (男21名
女19名)

氏名	年齢	性	反應(耗)	消失時間(分)				
杉○修○	7j	♂	$\frac{6 \times 7}{25 \times 20(+)}$	$\frac{40(20)}{50}$	寺○道○	10j 2m	♀	$\frac{9 \times 9}{25 \times 28(+)}$ 80
村○榮○	7j 9m	♂	$\frac{8 \times 9}{15 \times 18(+)}$	$\frac{60(30)}{50}$	宮○武○	11j 3m	♂	$\frac{10 \times 8}{25 \times 20(+)}$ 75(45) 70
安○孝○	7j	♀	$\frac{8 \times 7}{30 \times 25(+)}$	$\frac{50(25)}{60}$	中○照○	11j 3m	♂	$\frac{9 \times 7}{25 \times 20(+)}$ 50(30) 50
水○千○	7j 3m	♀	$\frac{10 \times 8}{25 \times 20(+)}$	$\frac{60(40)}{60}$	朴○男	11j 3m	♂	$\frac{7 \times 7}{25 \times 25(+)}$ 70(35) 60
小○二○子	7j 8m	♀	$\frac{10 \times 9}{25 \times 35(+)}$	$\frac{60(30)}{50}$	小○千○子	11j 7m	♀	$\frac{9 \times 7}{30 \times 18(+)}$ 75(30) 80
藤○榮○	7j 11m	♀	$\frac{10 \times 10}{30 \times 25(+)}$	$\frac{80(30)}{90}$	横○ト○子	11j 5m	♀	$\frac{9 \times 10}{28 \times 30(+)}$ 85(40) 70
川○良○	8j 7m	♂	$\frac{8 \times 9}{25 \times 20(+)}$	$\frac{70(40)}{70}$	澤○良	12j 7m	♂	$\frac{9 \times 8}{25 \times 25(+)}$ 60(35) 60
藤○祐○郎	8j 11m	♂	$\frac{6 \times 8}{25 \times 25(+)}$	$\frac{70(30)}{70}$	彦○卯○	12j 4m	♂	$\frac{7 \times 8}{25 \times 20(+)}$ 75(30) 65
小○千○子	8j 1m	♀	$\frac{8 \times 7}{20 \times 30(+)}$	$\frac{80(30)}{65}$	堂○國○	12j 1m	♂	$\frac{7 \times 8}{28 \times 20(+)}$ 75(30) 65
三○正○	9j 3m	♂	$\frac{7 \times 9}{20 \times 18(+)}$	$\frac{70(30)}{80}$	佐○初○	12j 1m	♀	$\frac{9 \times 7}{25 \times 30(+)}$ 70(35) 85
鶴○邦○	9j 7m	♂	$\frac{9 \times 9}{25 \times 30(+)}$	$\frac{70(40)}{60}$	小○金○	12j 11m	♀	$\frac{10 \times 9}{25 \times 20(+)}$ 80(45) 80
北○忠○	9j 4m	♂	$\frac{9 \times 8}{25 \times 30(+)}$	$\frac{60(35)}{50}$	笠○和○	12j 2m	♀	$\frac{7 \times 9}{30 \times 20(+)}$ 70(30) 80
佐○幸○	9j 1m	♀	$\frac{7 \times 9}{28 \times 20(+)}$	$\frac{75(40)}{80}$	長○俊○	12j 4m	♀	$\frac{7 \times 8}{28 \times 25(+)}$ 70(30) 65
小○松○	9j 11m	♀	$\frac{9 \times 8}{35 \times 30(+)}$	$\frac{75(30)}{80}$	西○萬○子	13j	♀	$\frac{7 \times 9}{28 \times 25(+)}$ 70(30) 65
中○外○	9j 2m	♀	$\frac{7 \times 8}{20 \times 20(+)}$	$\frac{50(40)}{50}$	北○吉	14j 5m	♂	$\frac{7 \times 7}{\text{士}}$ 60(35) 40
野○和○	10j	♂	$\frac{7 \times 6}{15 \times 20(+)}$	$\frac{70(30)}{60}$	若○暢○	14j 2m	♂	$\frac{7 \times 7}{20 \times 18(+)}$ 60(30) 50
佐○富○	10j 2m	♂	$\frac{7 \times 8}{20 \times 20(+)}$	$\frac{70(45)}{70}$	東○捨○	14j 6m	♂	$\frac{9 \times 7}{25 \times 20(+)}$ 75(40) 75
三○正○	10j 11m	♂	$\frac{6 \times 7}{20 \times 25(+)}$	$\frac{50(20)}{50}$	佐○秀○	14j 2m	♂	$\frac{7 \times 8}{20 \times 18(+)}$ 80(50) 65
西○志○子	10j 8m	♀	$\frac{10 \times 9}{30 \times 25(+)}$	$\frac{65(20)}{60}$	中○瑞○	15j 1m	♂	$\frac{8 \times 8}{30 \times 20(+)}$ 80(45) 50
水○安○	10j 2m	♀	$\frac{9 \times 8}{30 \times 25(+)}$	$\frac{80(30)}{80}$	高○都	15j 4m	♀	$\frac{6 \times 7}{30 \times 20(+)}$ 70(40) 85

備考. 表(-)参照スベシ.

第 6 表 健康成人「ヒスタミン」皮内反應成績 (10000倍溶液)

氏 名	年齢	性	反應(耗)	消失時間 (分)
咲 ○	45j	♂	$\frac{8 \times 9}{30 \times 30(+)}$	$\frac{70'}{70}$
直 ○ ナ ○	35j	♀	$\frac{8 \times 10}{20 \times 25(+)}$	$\frac{70}{65}$
西 ○ 貞 ○	19j	♀	$\frac{10 \times 7}{18 \times 35(+)}$	$\frac{65}{48}$
松 ○ あ ○	32j	♀	$\frac{9 \times 8}{35 \times 25(+)}$	$\frac{75}{75}$
島 ○ 文 ○	30j	♂	$\frac{10 \times 10}{35 \times 25(+)}$	$\frac{80}{75}$

島 ○ 貞 ○	19j	♀	$\frac{10 \times 11}{25 \times 35(+)}$	$\frac{70}{60}$
木 ○ 貴 ○	19j	♀	$\frac{10 \times 10}{30 \times 30(+)}$	$\frac{70}{60}$
白 ○ 叔 ○	17j	♀	$\frac{12 \times 10}{35 \times 30(++)}$	$\frac{90}{120}$
若 ○ 文 ○	31j	♂	$\frac{9 \times 10}{25 \times 30(+)}$	$\frac{80}{100}$
中 ○ と ○	18j	♀	$\frac{9 \times 10}{22 \times 28(+)}$	$\frac{70}{65}$

第 5 章 總括及ビ考按

總 括

1. 武田製鹽酸ヒスタミン」ノ各種濃度ノ生理的食鹽水溶液ヲ用ヒテ皮内反應ヲ檢査セリ。ナホ對照トシテ P_H 7.2ノ殺菌生理的食鹽水ヲ用ヒ注射量ハ何レモ 0.01ccヲ使用セリ。

2. 注射部位ハ前膊屈側中央部ヲ選ビ、該部ヲ「エーテル、アルコール」ヲ以テ清拭シ腕ハ常ニ水平位ニ位置セシメテ觀察セリ。

3. 扁平疹消失時間ノ判定ハ皮膚浸潤硬結消失時間ヲ以テ記載セリ。

4. 鹽酸ヒスタミン」扁平疹及ビ紅暈消失時間ハ鹽酸ヒスタミン」濃度ト平行關係ニアルガ如ク、10000倍生理的食鹽水溶液デハ扁平疹消失時間ハ幼兒平均 66.1分、學齡兒平均 70.38分ニシテ紅暈消失時間ハ幼兒平均 61.0分、學齡兒平均 65.6分、且ツ生理的食鹽水扁平疹消失時間ハ幼兒平均 30.1分、學齡兒平均 33.4分ノ成績ヲ得タリ。

ナホ健康成人ニ於ケル鹽酸ヒスタミン」扁平疹消失時間ハ平均 74.0分、紅暈消失時間 73.8分ノ成績ヲ得タリ。

次ニ「H」皮内反應ノ生理的變化ニ關シテ一言セン。

1. 個體ニヨリテ感受性ヲ異ニス。
2. 以上試驗年齡範圍内ニ於テハ幼若ナル者

ニ活潑ニ表ハル。

即チ幼兒ハ學齡兒ヨリモ反應出現時間速カニシテ、紅暈色調比較的強シ、幼兒ニ在リテハ毛細血管網廣ク、血流ニ富ミ、且ツ、結締織ノ膨化力大ナル爲ニハ非ザルカ⁽³⁶⁾。

3. 幼兒ハ學齡兒ニ比シ扁平疹及ビ紅暈消失時間短縮セリ。

考 按

疫癩様中毒症狀發生ノ本態ニ關シテハ諸家獨自ノ見解ヲ發表シテ論争盛大ヲ極メ、未ダ決定的ナルモノナシ。疫癩異常體質說ニ關シテモ、或ハ胸腺淋巴體質ナリトシ、或ハ局所血管攣縮質ナリトシ、或ハ「ヴィタミン B 缺乏說」ヲ以テ解決セントシ、異常體質說解決ニハ未ダ道遠シノ感アリ。

最近當教室西村氏ハ泉教授指導ノ下ニ疫癩中毒症發生ノ本態ニ關シテ研究發表スルトコロアリ。氏ニヨレバ其ノ本態ハ「H」ナラント云フ。

最近、谷口、神前兩氏ハ疫癩經過兒ガ「H」皮内反應態度ニ於テ過敏ナリト論ジ疫癩「H」說ニ對シテツツノ大イナル示唆ヲ與ヘタリ。余ハ疫癩異常體質說究明ノ第一歩トシテ疫癩異常體質說ト「H」トノ關係ヲ知ラント欲シ。先ヅ個體ノ「H」感受性ヲ檢査セントシテ健康兒ノ「H」皮内反應ヲ試ミタリ。

1. 「H」扁平疹ト紅暈トノ關係ニ就イテ

扁平疹ハ毛細血管内皮細胞透過性ノ充進ニヨリテ血管内ヨリ組織間隙ヘノ水分ノ移動ヲ來スニヨリテ生ズルモノニシテ、Lewisニヨレバ紅暈ノ強弱ト扁平疹ノ大小トノ間ニハ一定ノ關係アリテ、紅暈強度ナレバ扁平疹又大ナリト云フ。即チ周圍血管ヨリモ細血管ヘノ流血量大ナル時ハ組織間隙ヘノ水分ノ移動量モ大ナル爲ナク、而シテ幸野氏ニヨレバ血管ノ透過度ハ血管ノ擴張度ニ比例シ、血管ノ擴張ハ略々「H」濃度ニ比例スト云フ。斯カル事實ハ余ノ實驗成績ニモ明カニシテ、幼若ナル程紅暈色調強ク從ツテ又扁平疹大ナリ。然レ共笠井、永澤氏等ガ紅暈消失時間ヲ以テ扁平疹消失時間判定ノ基準トナセルハ余ノ賛成シ能ハザル所デアツテ、既ニLewisノ說ニヨリテ明カナル如ク、扁平疹ト紅暈ニ働ク原因ハ同一ニ非ズ、前者ハ「H」直接ノ作用ニシテ後者ハ所謂 Axonreflex ナリ。今余ノ成績ニヨレバ扁平疹及ビ紅暈消失時間差ハ平均5分ニシテ、而モ、時ニ扁平疹消失ノ紅暈消失ヨリ早キ事アリ又 Bergerノ反應型ノ記載

ニ徴スレバ、紅暈ナキ扁平疹ノ大サ、紅暈ヲ有スル扁平疹ニ優レリ。即チ扁平疹ト紅暈トハ常ニ必ズシモ平行關係ニ在リト云フ能ハズ。

2. 生理的變化ニ就イテ

第4表及ビ第5表ニヨリテ明カナル如ク個體ニヨリテ感受性ヲ異ニシ、又年齢的ニハ幼若ナル者ニ活潑ニ現ハレ、吸收消失時間短縮セリ。即チ幼若ナル者程扁平疹大ニシテ、紅暈又大ニシテ色調比較的強ク、反應出現時間迅速ナリ。Benedict a. Baarニヨレバ幼兒ニ於テハ結締織ノ膨化力大ナリト述べ、Leonhardtニヨレバ幼兒ハ毛細血管網廣ク、血流ニ富ミ、吸收面大ニシテ、組織ノ水分要求及ビ親和力幼若ナルモノ程大、且ツ組織ノ弾力纖維發育不全ナリト云フ。斯カル皮膚ノ構造的變化ガ生理的變化ヲ招來スルナラン。而シテ又神經發育程度モ之ニ關與スルナラン。

拙筆ニ當リ終始御懇篤ナル御指導並ニ御校閲ヲ賜リタル恩師泉教授ニ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ捧ゲ、又種々御便宜ヲ賜リタル吉田氏ニ對シ深謝ス。

文 獻

1) 鈴木直光, 疫癩様腦症ノ原因. 福岡醫科大學雜誌, 第26卷, 第10號, 1800頁. 2) 清野, 大久保, 赤痢及小兒赤痢屍ニ於ケル消化管粘膜ノ病理解剖學的變化ニ就イテ. 日本微生物學會雜誌, 第5卷, 509頁. 3) 大原清之助, 九州ニ於ケル疫癩, 特ニ其病原體ニ就イテ. 日新醫學, 第12年, 第10號, 1753頁. 4) 伊澤爲吉, 疫癩. 疫癩第2版, 85頁. 5) 楢林篤三, 所謂自家中毒症. 兒科雜誌, 304號, 282頁. 6) 川田敬治, 疫癩ノ定義, 症候, 豫後及治療法ニ就イテ. 東京醫事新誌, 2968號, 30頁. 7) 泉田知武, 疫癩症狀ニ關スル新知見ノ殊ニ「グイタミンBニヨル治療」ニ就イテ. 東京醫事新誌, 第2894號, 2045頁. 8) 伊東祐彦, 疫癩. 醫事新聞, 第1095號, 649頁. 9) 西野, 荒川, 外科の手術後所謂疫癩様症狀ヲ呈セン患兒ノ統計的觀察. 兒科雜誌,

第44卷, 第7號, 102頁. 10) 箕田眞, 疾病治療ト體質. 診斷ト治療臨時増刊號, 昭3, 377頁. 11) 箕田眞, 眞性疫癩. 兒科診療, 第3卷, 第2號, 1頁. 12) 和泉成之, 小兒ト體質異常. 實驗醫報, 第21年, 45頁. 13) 村田三郎, 所謂疫癩ノ家族的罹患ニ就イテ. 日本傳染病學會雜誌, 第10卷, 第7號, 800頁. 14) 山下秀雄, 赤痢及疫癩糞便ノ研究. 乳兒學雜誌, 第11卷, 第1號, 73頁. 15) 西村忠恕, 疫癩様症狀發生機轉ニ關スル研究. 第2報, 十全會雜誌, 第44卷, 第6號, 1568頁. 16) 同人, 疫癩様症狀發生機轉ニ關スル研究(第3報). 十全會雜誌, 第44卷, 第7號, 1822頁. 17) 谷口, 神前, 所謂疫癩異常體質ニ關スル知見. 日本醫事新報, 第931號, 2521頁. 18) 博田三雄治, 重症赤疫癩ノ豫後判定ニ「ヒスタミン」皮内反應ノ意義. 臨床内科,

- 昭和15年, 11月號, 17頁。 19) 横山量平, 「ヒスタミン」ニ關スル研究. 醫學研究, 第11卷, 上半期, 261頁。 20) 中村壽一, 「ヒスタミン」ノ分離定量法. 醫學研究, 第12卷, 第8號, 2429頁。 21) 福田昌, 妊娠時血液尿及臟器ノ「ヒスタミン」含量増加並ニ其ノ機轉ニ就イテ. 醫學研究, 第13卷, 3291頁。 22) 石川光昭, 「アナフィラキシー」概論. 63頁。 23) Hanke u. Koessler, Journal of biological chemistry Vol. 59, P. 889, 1924。 24) 細谷清, 過敏症ト「ヒスタミン」又ハ「ヒスタミン」様物質トノ關係. 皮膚泌尿器科雜誌, 第36卷, 第2冊, 195頁。 25) 渡邊清, 「アナフィラキシー」ニ於ケル「ヒスタミン」又ハ「ヒスタミン」様物質ニ對スル疑義. 長崎醫學會雜誌, 第10卷, 第2號, 159頁。 26) 米増保, 「ヒスタミン」解毒ニ關スル實驗的研究. 醫學研究, 第12卷, 第1號, 117頁。 27) Feldberg u. Schilf, Histamin Bd. 20, 1930。 28) 秋山義春, 「ヒスタミン」ニ關スル研究. 福岡醫科大學雜誌, 第30卷, 第1號, 42頁。 29) 木島寛亮, 火傷毒ニ對スル「ヒスタミン」ノ意義. 日本藥物學會雜誌, 第22卷, 第3號, 16頁。 30) Th. Lewis, Vasclar reactions of the skin to injury Journal for the study of the circulation Vol. 13, P. 203, 1925。 31) Moro, Bemerkungen zur Lehre von der Säuglingsernährung Jahrbuch für K. H. K. Bd. 35, S. 400, 1917. Bd. 44, S. 217, 1921。 32) Schiff u. Kochmann, Zur Pathogenese der Ernährungsstörungen beim Säugling. Jahrbuch für K. H. K. Bd. 99, S. 181, 1922。 33) Georg, Roske, Über Bedingungen der Aminbildung durch Bact. cali. Jahrbuch für K. H. K. Bd. 120, S. 186, 1928。 34) Berthlot u. Bertrand, Ebenda。 35) Barger a. Dale, Ebenda。 36) 占部虎雄, 「イレウス」症ノ死因ニ關スル實驗的研究. 日本內科學會雜誌, 第18卷, 9頁, 872頁。 37) 原弘毅, 小兒期ノ所謂中毒症狀ニ見タル痙攣時ニ於ケル血液安門増加ノ病理的意義ニ就テ. 箕田教授就任十週年記念誌。 38) 中富和夫, 過敏症毒ニ關スル研究. 岡山醫學會雜誌, 49年, 第3號, 490頁。 39) 高津忠夫, 「ヒスタミン」ノ經口の竝ニ非經口の投與ニヨル影響ノ年齢の差異. 兒科雜誌, 第45卷, 第7號, 9頁。 40) 三田定則, 種々ノ疾病現象ト肝臟機能障礙. 醫界展望, 第1號, 9頁, 1934。 41) 四島茂雄, 過敏症ト「ヒスタミン」トノ關係ニ就イテノ實驗的研究. 福岡醫科大學雜誌, 第31卷, 第12號, 2060頁。 42) Harris, Observation upon a histamine like substance in skin extracts Heart Vol. 14, P. 161, 1927。 43) Nathan u. Sack, Über entzündungserregende Wirkung von Extrakten aus normaler und pathologisch veränderter Haut beim Menschweiner Archiv f. Dermatologie u. Syphilis Bd. 138, 1922。 44) 川口, Über den Einfluss d. Lichtstrahlen auf den gesamt cholesteringehalt d. Haut. Biochemische Zeitschrift Bd. 221, S. 232, 1930。 45) H. O. Loos, Histamin u. Entzündung. Wiener. kl. Wschr. Jg. 48, S. 196, 1935。 46) 磯部泰輔, 人工皮膚炎ト「ヒスタミン」様物質. 皮膚泌尿器科雜誌, 第39卷, 288頁。 47) 瀨夏好太, 「デアツオ」反應ノ生化學領域ニ於ケル擴充. 日本生化學會會報, 第7卷, 第3號, 67頁。 48) 永澤滋, 肺結核ニ對スル「ヒスタミン」皮内反應. 臨床内科, 第3卷, 第3號, 277頁。 49) 笠井重雄, 「ヒスタミン」皮内反應ノ診斷的應用. 大阪醫事新誌, 第5卷, 第11號。 50) 大矢全節, 「ヒスタミン」ニヨル局所皮膚反應. 臨床ト藥物, 第3卷, 221頁, 279頁。